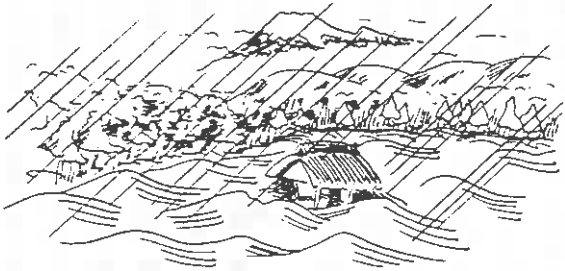
浮島沼の沼のばんばあ



昭和五十九年四月五日号

浮島沼が広々とした大沼だったころ、夕方から夜にかけて低く太い、うめき声が沼のどこからともなくきこえました。これを沼の周辺の人たちは、「沼のばんばあ」と呼んでおそれていました。

大雨で家が流される

昔々、浮島村にかわいい子ども連れのおばあさんがやってきました。

おばあさんは、村人から物をもらいながら、暮らしを立てていました。

村人は、かわいい子どもに同情して物を与えていましたが、たび重なるにつれてけぎら

いするようになりました。そこで、おばあさんは、人里はなれた沼のほとりに住むことにしました。そして、長雨の続いたある年の六月、特にひどくふった雨のため、おばあさんの家は、一晩のうちに流されてしまいました。

流れはどんどん早くなり、子どもの姿も見えなくなりました。

おばあさんは、流されながらも子どもの安否を気づかい「ボー、ボー」と子どもを呼びつづけました。でも返事はありません。そして、大きなうねりにのまれ、子どもも、おばあさんも、とうとう死んでしまいました。それからというものは、夜になるとおばあさんが子どもを呼んだ、「ボー、ボー」という声が沼から聞こえるので、村人たちは、「沼のばんばあ」と呼び、おそれていました。

食用がえるの鳴き声かな

後藤信夫さん（西船津）

西船津に住む後藤信夫さんは、この話は、ずいぶん古い話で子どもが泣きやまない時など、「沼のばんばあが来るぞ」とおどし文句として使ってたね。だけど、もう知っている人は、ほとんどいないじゃないのかね……。わしゃあ、あのきみ悪い声の正体は、食用ガエルの鳴き声じゃないかと思うがね……。と語ってくれました。